

椿姫

あらすじ



<第1幕>「乾杯の歌」 © 田中克佳

第1幕

パリのヴィオレッタのサロン

ヴィオレッタが、友人のフローラ、ドビニー侯爵、ドウフォール男爵、ガストン子爵など、仲間を集めてパーティを開いている。ガストンは、ヴィオレッタにアルフレード・ジェルモンを紹介する。ヴィオレッタにずっと憧れてきたアルフレードは、「酒を汲もう」と歌い、一同もそれに合わせる（乾杯の歌）。

ダンスに興じようと皆が隣室に移動する矢先、ヴィオレッタは突然目まに襲われる。心配したアルフレードが来て、恋心を打ち明ける（思い出の日から）。最初受け流していたヴィオレッタだが、彼の気持ちに心を動かされ、翌日の再会を約束する。

パーティの後、もの思いに耽るヴィオレッタ。アルフレードの言葉を思い出し、真実の愛を知った喜びに浸る（ああ、そはかの人か）が、すぐ我に返り、「自分は娼婦、自由な快樂に生きるの」と自嘲的に歌う（花から花へ）。

第2幕

〈第1場〉 パリ郊外の田舎家

*本演出では屋外で展開される。

アルフレードとヴィオレッタがパリの郊外で幸せな暮らしを始めて3ヶ月が過ぎた。アルフレードは、満ち足りた愛の日々を歌う（燃える心を）。しかし、生活のた

めにヴィオレッタが身の回りの品を切り売りしている。アンニーナから聞かされ、善後策のためパリに向かう。

フローラからのパーティの招待状を見ていたヴィオレッタのもとに、突然アルフレードの父ジョルジョ・ジェルモンが現われる。息子が娼婦にだまされていると思い込んでいた彼は、ヴィオレッタの真剣な愛を知るが、それでもなお、「娘の縁談に差し障っているので、息子と手を切ってくれ」と迫る（天使のように清らかな娘を）。拒むヴィオレッタだが、最後はジェルモンに説き伏せられる。



<第2幕>「天使のように清らかな娘を」 © Ken Howard

ジェルモンが去った後、ヴィオレッタはアルフレードに別れの言葉をしたためる。彼女は戻ってきたアルフレードに、抑えがたい思いを抱きながらも、家を出ていく。

追って届けられた別れの手紙を見て驚くアルフ

